
† 月光、血く染まる夜に †

黒鷹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

十月光、血く染まる夜に十

【Nコード】

N4533B

【作者名】

黒鷹

【あらすじ】

——日が沈んだら、絶対に足を踏み入れるな——この公園にはそんな言い伝えがあった。そして俺はひょんなことからその公園に入ってしまう。するとそこには異世界が広がっていて——！？

第1夜 暗闇の公園（前書き）

この作品にはボーイズラブ&性的な要素が含まれています。 注意してください。

第1夜 暗闇の公園

——日が沈んだら、絶対に足を踏み入れるな——

この鷺川市には、昔からこんな言い伝えがあった。
その場所は……コウモリ公園。

見るからに妖しげな公園で、昼間であっても近づく者はほとんどない。

肝試しに、と言い伝えを破った者は2度と戻らず、
公園を壊そうとした工事関係者は全員事故死した。

『呪われた公園』

そう呼ばれることも多々あった。

そして俺、蒼李^{あおい} 篝^{かがり}はこんな言い伝えに不信感を抱きつつも、
それを守っていた。

公園の存在は知っていた。でも、行ったこともないし、場所も知らない。

ちなみに俺は、愛犬・ケンタの散歩中だった。

「ったく、お前はわがまま犬だなあ。一日くらい散歩しなくても大丈夫だって。」

「わんっ！」

ケンタ（オス）はぱたぱたと尻尾を振って楽しそうに小道を歩いていた。

すでに午後6時過ぎ。夕飯の匂いがもれている。

あたりはすっかり日が暮れて、街灯が輝いているくらいだった。

「ワンッ！ワンッ！」

「あ、おい！ケンタ！！」

ケンタがいきなり走り出す。俺は必死にそれを追いかけた。

だが、捕まえたのは何メートルも先で、しかもケンタは地べたに座り込んでいた。

「ここどこだよ、もう。……ん？」
公園？

誰かの忘れ物だろうか、野球のボールが転がっている。

「忘れ物か？」

俺は取りに行こうとして、1度足を止めた。

（言い伝え……背く事になるのか？）

よく見てみれば、ここだけが他と比べて妙に暗い。

「……怒られたら、ケンタのせいだからな？」

「わんっ！」

俺が足を進めた瞬間——！

……ズンッ……

足元が沈んだ。驚いて飛び退こうとしたが、何かに捕まれたように動かない。

そして、そのまま

「うわっ、んだよ、これっ！」

ずるりとそのまま地面に飲み込まれ、俺は引きずり込まれた。

ただ、ケンタの鳴き声だけが耳に残っていた。

「ようこそ、闇の世界へ。」

耳元で低い声に囁かれた気がした。

俺は状況を把握しきれず、意識をシャットダウンする事にした。

眠りに落ちている間、俺は、昔聞いた事を思い返していた。

このコウモリ公園で消えた人間は少ない。

誰一人として帰ってこなかったとされているが、実際には1人だけ、戻ってきたものがいたという。

名前も、それがいつだったのかも、何一つとして記録には残っていない。

書面では、の話だが。

その男が発見されたのは、男に行方不明のラッテルが張られた次の日の朝方。

まだ日が昇る以前に、1人のお年寄りが散歩をしていて、偶然公園の前を通りかかった。

すると、そこには男が公園の入り口に寄り掛かっていたそうだ。

だが、男は無事ではなかった。

ずっとぶつぶつと意味不明な言葉を口走り、彼の髪は真っ白になってしまっていたという。

男は、その後昇った太陽を見て、目玉を焦がして、失明してしまった。

そして精神病患者として病院に入院した4日後、自らの爪で喉元を引き裂き自殺した。

その男が発見された時、何を言っていたのかは見つけた老人は覚えていなかった。

ただ——この世ではありえないこと、だそうだ。

・・・ピチャ・・・ピチャ・・・ピチャ・・・

俺は怪しげな水音で目を覚ました。

（ん．．．あれ．．．？）

俺の両腕、両足には鎖がついていて、身動き一つ取れなかった。

「なんだ．．．？この匂い．．．」

鉄のような匂い．．．でも、とても身近で．．．

俺はそこでふと気付いた。

この匂いは．．．血だ。

むせかえるような血の匂いが鼻をさす。

「子猫．．．子猫．．．迷い猫．．．」

どこからともなく声が聞こえ、俺は周りを見渡した。

そこには一つの窓。そしてその窓に腰掛けている1人の男。

窓から差し込んでいるのは、深紅の光。

その先に見える月は、白でも黄色でもなく、赤く輝いていた。

「誰．．．？」

男は答えず、そのまま続けた。

「今夜のディナーは迷い猫．．．」

（これは．．．歌．．．か？）

ピアノの音が聞こえるわけでも、ギターを弾いているわけでもなかったが、確かに歌だ。

「拒めば貴族の腹の中．．．」

「のめば永遠に貴族の玩具．．．」

何なんだこの歌、と俺は心の中で問うた。

「あの．．．ここはどこですか？」

「君にとつての地獄。」

「じ、地獄？」

「そう、ここでは君は食材だよ。」

「な、何言つて．．．」

「本当の事を言っているまでさ。それじゃあ、失礼するよ。迷い猫。」

（そうか、あの歌は俺の歌だったのか．．．）

だとしたら、なんて悲しい運命を辿る予定なんだ、俺は。と心の中で悪態をついていた。

そんな事をしていたらなんだか悲しくなってきた、俺は考えないようにした。

ケンタがちゃんと家に帰れたか。母さんが心配してないか。

とりあえず、この場所について深く考える事をやめた。

「あれ……？」

なんだ？この服……

18世紀の紳士の服。社交界のような、葬式のような。その時、扉を開く音がした。

「おや、起きたようだね。」

息をのむほど美しい声は、静まり返ったこの部屋に、妙に響いていた。

第2夜 妖しの世界

「おや、起きたようだね。」

その透き通るような、色香を漂わせる美声は男である俺でさえも聞き惚れてしまいそうだった。

カツ、カツと規則正しくヒールの音が刻まれていく。

俺は重たい体を少しだけ起して、男の方を見た。

「なっ……………」

言葉を失うほど、美しい男だった。

薄竜胆色^{ドーンミスト}の髪は後ろで結いであつたが、腰の辺りまである。少し乱れて前髪が垂れ、その隙間から浅梔子色^{ペールアップリット}の美しい瞳がのぞいていた。体型はすらっとした長身で、優雅な腰つき。そしてやっぱり18世紀のレース付きの服。でも、典型的な日本人タイプの俺より、断然似合っていた。むしろ、この男のためにこの服が作られたのではないかと思うほど。

「君が何人目だったかな。誤って……こっちに迷い込んでしまっ子ほ。」

「だ、誰だよ……お前……………」

「ファウスト・ヴォルテル・レンドル。君は？」

「ここ……どこだよ……………」

「おいおい、私の問いに答えてくれないかね？話が進まないだろう？」

「人のことさらっておいて、よくもそんな口を……………!!」

「さらう？人聞きの悪い……………」

ファウスト、と名乗った男は俺に少しずつ近づき、鋭利な爪で服を

引き裂いた。

爪が少しあたって胸の辺りが少し切れて痛い。

じんわりと血が滲む。

「助けてあげたのだよ？あのままあそこを彷徨っていれば、ギルダム公爵のところへ連れて行かれて、今ごろ皿の上だっただろうね。」

そして、ファウストは俺の胸に顔を近づけ、その血を舐めた。ぞく、といいようなない感覚が俺のなかを突き抜ける。

「何しやがっ……」

「あんまり抵抗すると……食べちゃうよ？」

ぐつと俺の瞳を捕らえたファウストの瞳の色は、浅梔子色ペールアップリコットから真つ赤な濃蘇芳色ワインへ変わっていた。

底光るファウストの瞳を見て抱く気持ちは、美しいを通り越して、恐怖を覚える。

『拒めば 貴族の腹の中』

俺の脳裏にあの歌が浮かぶ。

（こいつ……まさか……本当に……？）

人間じゃないのかもしれない、そんな感情を抱いたのは生まれてから初めてだった。

「ファウスト様、いけませんよ。お客人なのでしょう？」

「へム……お前は見つけるのが少々早すぎないか？」

「ファウスト様のお考えになる事を、へムは手に取るようにわかります。」

またも扉から声が聞こえてきた。

今度はまだ若い、俺よりも若い少年のアルトボイス。

鬱金色カナリの髪は肩まで伸び、ウェーブがかかっている。

瞳の色は柔らかい若竹色で、彼の性格をその瞳が物語っていた。

へム、と呼ばれたその少年は、指に鍵を引っ掛けていた。

そしてその鍵で、俺の足と腕についていた枷を外した。

「痛かったでしょう？ 枷も……この傷も……」

「あ、ああ……」

少年が触れると、見る見るうちに痛みはひき、傷は治ってしまった。

俺は確信した。

こいつらは人間ではない、と。

アルトボイスの少年は、俺に微笑みかけた。

「僕は、ヘイムダル・クライスレッド・ラシング。ヘムとおよびください。」

「ここは……」

「ああ、そうでしたね。ここは、レンドル公爵の屋敷です。すみません、こんなかび臭いところに閉じ込めてしまって。」

「いや、まあ……」

俺はなんとコメントしていいものなのか、全くわからなかった。

自分がどうしてここに来ているのか、そもそもここはどんなところなのか。何もかもが不明。ただわかったことは、この恐ろしく美しい男は、そのレンドル公爵の血縁の者だということだけ。最も、そのレンドル公爵ですら、俺は知らないのだが。

「以前にここに迷い込んだ人間は、鼻を衝かれてしまったね。精神が狂ってしまったのだよ。だから、仕方なくここへ。すまなかったね。」

恐怖心からか、肩が一瞬びくついた。

「ほら、ファウスト様。お客人が怖がっていらっしやるじゃないですか。全く、何度言ったらわかるんですか？」

「仕方ないだろう？ 私の趣味なのだから。」

はあ、とヘムはため息をつき、一拍置いてから問うた。

「……そうそう、あなたのお名前は？」

「・・・蒼李 簀。」

「美しい名前だね。」

あまり一般的な名前ではなくて、昔からいろいろといわれてきた俺だったが、美しいといわれたのは生まれてこの方初めてだ。少々、戸惑いを隠せなかった。

そして、俺は扉の前まで案内された。

「少しつらいかも知れませんが、我慢してくださいね。」

ゆっくりと扉が開かれる。

「っ!!」

ひどかった。

とても豪華な装飾品が溢れかえっている廊下が見えているのだが、扉から流れてくるにおいは、ひどかった。鼻を衝かれて精神が狂う、確かにそうだと思うほど。

血なまぐさい。まるで大量出血の患者が50人ほどいるくらいに、血の匂いが充満していた。

「うつつ・・・」

凄まじい嘔吐感が襲う。

「顔色が悪いよ？大丈夫？」

俺は首をふるふると振った。口を開くのも恐ろしい。

「ファウスト様、急ぎましょう。このままだと、同じことの繰り返しです。」

「そうだね。」

肩に手を添えられて向かった先の部屋は、少しだけ居心地がよかった。

血の匂いが押さえられている。俺は何度も深呼吸をした。

「何なんだよ・・・ここは・・・お前らは・・・何者・・・!？」

「ここはダークブラッドタウン。略して、DBタウン。魔が蔓延りし世界。」

「ま、魔？」

「ここには、あなたのような人間はいません。一人として。」

「このDBタウンに暮らすのは、吸血鬼、死神、精霊……などの種族だけだよ。」

背中に冷たいものが走った。

——日が沈んだら、絶対に足を踏み入れるな——

いつの時代の誰が残した言葉なのかは知らないが、この言葉は真実だったようだ。

第3夜 禁断の果実

俺は、1人で窓から外の風景も眺めていた。

1キロほど先に、町の明かりが見える。

だけどその町には、人間はいない。

『化け物』の類ばかりだという

なんて世界に来てしまったのだろう、と俺はため息をついた。

空を仰ぐと見えるのは、深紅の月。星一つない闇にぽっかりと浮かぶ、月。

「やっぱり、つらいですか？」

「え？あ、ああ・・・ヘム。どうしてここへ？」

「篝さんのことが心配だったんです。いけませんでしたか？」

「いや、嬉しい・・・よ。」

（そういえば、今あいつは・・・何してるんだ・・・）

「・・・もしかして今、ファウスト様のことを考えてます？」

「えっ！？な、なわけないだろうっ！！」

「おや、凶星みたいですね。」

意地悪い顔をして俺の顔を指差すヘム。

それから少しだけ間を置いてから口を開いたのは、俺のほうだった。

「俺・・・悪いことしたのかな、って。助けて・・・くれたんだろ？」

「あの状況では仕方ありませんよ。僕でもそうします。・・・ファウスト様は、基本的にはいい方なんです。ただ少し・・・変態なだけで。」

「それっていい方、なのかよ。」

俺は思わず笑ってしまった。変態、は基本的に悪いイメージだろうか？

「はじめて笑ってくれましたね。ずっと、人一人殺めたみたいな顔してましたから。」

「マジ？やば・・・」

「でも、ファウスト様は、本当にいい方ですよ。僕のこと、拾ってくれたんです。」

「へえ……」

俺は、やっと気を許すことが出来た。

ずつと緊張しきつて、いつ殺されるかと不安だったが、ヘムはいい奴らしい。その、ファウスト、がどうなのかはまだ判断しかねるが。「そういえば、ヘムとファウストって何なんだ？」

「何、とは？」

「ほら、その種族とかいうやつが。」

「ああ、ファウスト様は吸血鬼ですよ。」

「……やつぱり、何かそんな気がしてた。」

あの妖艶な振る舞い。昔、無理矢理女子に貸された漫画とよく似ている。

「僕は……墮天使です。誰にも、言わないでくださいね？」

「ああ。」

翼をなくしたといえど、天使というのは充分領けた。傷を癒す能力も多分そのせいだろう。

「あ、そうだ。」

ヘムはいつから持っていたのか、バイオリンを取り出した。

「バイオリン？この国にもあるのか？」

「いえ、ありません。これは、以前に迷い込んだ人間が持っていたものです。非常に美しい音色だったので。」

ヘムはバイオリンを奏でた。

俺の聞いたことがある曲だった。両親がクラシック好きで、子供の頃から何度か聞いた。

「アルビノーニのアダージョか。悲しい曲だよな。」

「曲名ですか？何分、僕にはこの文字が読めなくて。」

楽譜には英語で、アダージョ、と書かれていた。

バイオリンの音色は、この屋敷とものすごく似合っていた。軋んだような音も、形も……

——悲しい音色も。

へムが出て行つてすぐに、扉がノックされた。

・・・コンコン・・・

「気分はどうだい？」

「あ、ファウスト。あの・・・俺・・・」

「どういう風の吹き回しかな？名前を聞いても答えなかった君が。」

「そ、そりゃあ、あの状況じゃ・・・」

「仕方ないね。」

『ファウスト様はいい方ですよ。』

本当だろうか、と疑わずにはいらなかった。

俺は牢屋にいるとき、思い切り世に言うセクハラをされたのだから。

「悪い。」

「何がかな？思い当たる節が多すぎて何ともいえないのだが。」

（いい・・・方・・・？）

「助けてもらったのに、ろくに礼も言つてなかったから。」

「ほう。じゃあ、君の世界では『悪い』というのが礼なのだね？」

「・・・もういい。俺を、元の世界へ戻してくれ。」

「・・・それは・・・無理かな。」

突然返ってきた返答に、俺は体を硬直させた。

「え・・・？」

「私には不可能だ。」

当然、すぐに帰れるものだと思っていた。

母さんも家で待ってるし、何より、ケンタが……。
でも、考えてみればそうだ。

こんな奇怪な世界からすぐさま返れるなんて、物語的にありえない。

「じゃあ、誰ならできるんだ？」

「そうだな。強いて言えば、死神、だろう。」

「し、死神！？」

「魂を送るために時々人間のところへ行くというから、連れて行ってもらえるかもしれないな。」

「死神ってどこにいるんだ！？」

「私の知っている死神で『ロキ』っていうやつがいるんだが、そいつならよくセンターにある『エリザベス』というバーで女と戯れていると聞いた。」

「バー？」

俺は、顎が外れそうになった。

人間の考える死神というものは、黒い服を着て、大きな鎌を持って、骸骨の顔をしているイメージだ。

その死神が、『バーで女と戯れている』？そんなバカな。

「……だけど、あいつに近づくのは進められないな。」

「どうしてだ？」

「会えばわかることだよ。」

「近づくなんて今言っただろうが。」

「口では説明できないんだよ。でも、ヘムはものすごく嫌っているよ。」

「そうか。」

堕天使が嫌うほど、たちの悪い男という事か……。

そんな事を考えていると、長い薄竜胆色^{ドーンミスト}の髪が、すぐ目の前に迫ってきた。

「な、何だよ……！？」

「すぐに戻ってしまったたり、しないでくれよ？」

「何で・・・！？」

「淋しいじゃないか、来てすぐになんて。」

熱い吐息を感じた。

その次の瞬間。

「・・・っ・・・！！」

生暖かいものが唇に触れた。

驚きのあまり目を見開くと、やっぱり目の前にはファウストが。

油断していたせいか、唇の間から舌が押し込まれ、歯列をなぞる。

「んっ・・・」

（何だ・・・これは・・・。抵抗・・・できない・・・）

それでもファウストの服を掴み、やめろ、と訴えてみるが、効果はなかった。

（甘い・・・）

これまで口にしてきた果実のどれよりも、甘い気がした。

ファウストの香水の匂いが、彼の血なまぐささを見事にかき消している。

俺は、おしよせる異様な感覚に耐えられなくなり、そのまま体から力を抜いた。

ぐらつと足元から崩れ落ち、俺の意識はいつの間にか失われていた。

第4夜 天使と墮天使

——子猫・・・子猫・・・迷い猫

——かの猫焦がれるヴァンパイア

——なれど所詮は禁の園

——待つは悲しき運命さだめのみ

(あれ?・・・なんか、歌詞が違つような気が・・・)

「ん・・・」

「大丈夫ですか?」

「あ、ああ・・・」

俺は少しだけ期待していたのかも知れない。

目を覚ましたら、明るい光が窓から差し込み、母さんが怒鳴る声が聞こえて、いつものように学校に行つて、帰つて来たらケンタの散歩。

だけど、その期待はすぐに粉碎された。

相変わらず、制御はされていても鼻を衝く血の匂い。俺の部屋より数十倍も豪華な部屋。

そして、ヘムが傍らで微笑んでいた。

「ファウスト様に何かされましたか?」

「ああ・・・って、はあ!??」

「隠すのが下手ですね。——ファウスト様が血相を変えて走つてきたんですよ。『ヘム! 簞が倒れた!』って怒鳴つて。」

「ファウスト・・・そうか・・・」

まだ・・・唇が熱い・・・。

「篝さん、顔、赤いですよ?」

「へ?・・・」

「一体何されたんですか?教えてくださいよ。」

「ふぁ、ファウストに聞けよっ・・・」

「嫌ですよ。おもしろくないじゃないですか・・・」

翼をもがれた意味が、何となくわかった気がした。

「そういえば・・・」

へムの表情が少しだけ暗くなった。

「帰りたい、って言ったそうですね。しかも、そのためには口キにも会つと。」

「そんなに嫌な奴なのか?」

「ええ・・・ものすごく。この世のものとは思えないほど。嘘つきで、女垂らしで、何を考えているのかわかりやしない。」

ここまで顔を歪ませたへムを見るのは初めてだった。

いつもそれこそ皮肉にも、天使のようだったへムが、今は全く違う。

「けどさ、俺、なんかわからなくなってきたんだ。」

「何がです?」

「俺自身は、帰りたい。でも、なんか・・・」

「帰りたくない理由が出来たってことですか・・・どういう心境の変化です?」

「俺にもわかんないから言っただろ?」

「そうでしたね、すみません。・・・なら、探してみればいいじゃないですか。なぜ、変化したのか、その理由を。」

「お前は、どう思う?へム。」

「そうですね。やっぱり、ファウスト様に関連してるんじゃないですか?」

「げ。」

「いい反応です。」

（ヘムの奴・・・俺で遊んでないか？）
だけど、ヘムの言っている事はたぶん実行する価値がある。
この世界に来て俺があったのは、ファウスト、ヘム、そして歌う男。
なら、きっと理由はファウストだと思う。
だけど・・・わからなかった。

——ここまで激しく求められる事なんて、なかったから。

「すみませんが・・・これは、何ですか？」

俺の前に差し出されたこれまた綺麗な皿。

でも、乗っているものが乗っているものだ・・・。

「安心して。ただの牛肉だから。」

「ファウスト、牛肉っていうのはいいと思うけど・・・」

これ、焼いたの？

赤い。焼肉屋でまだ皿に乗っている状態の赤さだ。

「焼いてるだろう？充分。」

「・・・厨房に行ってもいいか？」

「僕がしてきましたようか？」

「いや、自分でする。」

そうだった。ファウストは吸血鬼。血なんて気にもしないんだよな。
というか、どちらかといえばそっちが重要なのか？

その後、肉をしっかりと焼いてテーブルにつくと、ファウストもヘムも目を丸くして驚いていた。

「どんな風に焼いたらそんなに黒くなるんだ・・・？」

「篝さん、焼きすぎでは？」

「普通だから。」

なんだか、全てに躊躇いがちになってきた。

食べ物も、飲み物も。何がいつているのかわかりやしない。

「なあ、ファウスト。」

「何かな？」

「うぐっ……」

「ん？」

俺はここではじめて自分の異変に気付いた。

ファウストの目を見られない。先ほどの出来事が脳裏を過ぎり、まともではられない。

「ま、町に連れて行って欲しいんだ。」

「構わないよ。じゃあ、明日にでも行こうか。」

「いい……のか？」

「町だろう？止める理由はないからね。」

ファウストが口角を吊り上げて笑った。

それだけで心臓が跳ね上がり、牛肉が喉に詰まりそうになった。

「どうしたんだい？顔が赤いよ？」

「な、何でも……ない……」

（だから顔を近づけるなっ！）

俺は目を逸らしながら言った。とてもじゃないが近すぎる。

俺とファウストの距離は現在10センチ。ファウストの長い髪が俺の顔にかかる。

「ファウスト様。お行儀が悪いですよ？」

「へム、邪魔しないでくれよ。」

「何が邪魔なもんですか。篝さん、嫌がっているでしょう？」

「そうなのか？」

「うん、うん、うん。」

俺は必死に首を縦に振った。へムに感謝だ。

「残念。」

ファウストはすっと自分の席に戻った。

俺の頭の中は困惑していた。

なんとなく、ここにいることを楽しいと感じ始めている。
だけど、ここは俺のいるべき場所じゃない。

どうしたら……。

第5夜 深紅の瞳

外は相変わらず暗闇に一筋の赤い光が差し込まれているだけだった。でも、俺の体内時計が、今は夜だ、と知らせていた。何度も気を失っていたというのに、情けないにもほどがある。

「・・・・・・・・あつ・・・・・・・・!!」

静まり返った屋敷の中で、艶のある1つの声が響いた。

この声の主は・・・・

「へム？」

俺はどうにも気になり、眠たく重い体を起して、鼻を摘みながら屋敷の中を探索した。

一つの部屋に、明かりが灯っていた。

同時に、その部屋からはへムの声が聞こえた。

「・・・・・・・・もう・・・・・・・・立つてられな・・・・・・・・」

「・・・・・・・・。」

もう1人いるようだが、そいつは全く喋られない。

俺はそつと扉を開けた。

「な、何やって・・・・」

部屋の中には、信じられない光景が広がっていた。

ぐつたりと力をなくし、抱きかかえられているへムと・・・・・・・・フ

アウスト。

へムの首筋には2つの穴が穿たれ、赤い液体があふれ出している。

一方ファウストの口元は赤く染まり、2本の牙が覗いていた。

そして、その瞳は深紅に染まっていた。

「おや？・・・・・・・・簀・・・・・・・・？」

「簀・・・・・・・・さ、ん・・・・・・・・」

俺は恐怖感のあまり、その場から逃げ出し、廊下を走った。

いつもより、スピードが出ない。足が震えて、思っように走れない。
「君も・・・私に血をくれるのかい？」

一瞬にして俺の目の前に現れたファウストは、器用に下を使い、口元の血を舐めとった。

動きの一つ一つが妖艶で、恐怖感をさらに高めた。

俺は震えが全身に回り、床に這いつくばった。

我ながら、かっこいい姿とは思えない。

ファウストが俺の前にかがむ。

俺はばつと顔を逸らし、ファウストを避けた。

だがファウストは俺の顎をつかみ、すぐ近くまで顔を近づけた。

「君の血は・・・とてもおいしかった・・・。」

前に1度、血を舐めとられた事があったことを、俺はリアルに思い出した。

はぁ、と熱い吐息が首筋にかかる。

（もうだめだっ・・・！）

俺がぎゅっと瞳を閉じた瞬間、体がふわりと浮かんた。

「忠告しただろ？迷い猫。」

「あ、あんたは・・・。」

ラスベリ
京紫色の髪は肩まで伸び、耳には金色の翼が輝いている。

血のように赤い緋色の瞳。

黒いフードを被った男は、ひょいと俺を持ち上げ、笑った。

（助かった・・・。）

「迷い猫って・・・もしかして・・・。」

「そう。お前さんに歌ってやったのは、このオレ様よ。」

「あ、ありがとう。」

「いいってことさ。人間のお客人。」

この男もまた、ファウストとは違った美しさを持っていた。

お貴族様タイプのファウストとは違い、この男はホスト系だ。

「貴様・・・。」

「いきなり人間を襲うなんてのは、尋常じゃねえよな？レンドル公

爵？」

「ロキ！！」

へムの声が暗闇から響いた。

（ロキ？そうか、こいつが・・・）

「ん？へймダルじゃねえか。元気だったか？」

「僕に気安く話しかけるなっ！」

「冷たいねえ。」

ふうっとため息をつきながらへムを見やるロキ。

今の状況では、こいつらがどんな関係なのかは、想像もつかない。

「その子を返してくれないか？」

ファウストが腰に響くような声で、低く言った。

「いいともさ。そのかわり・・・喰うなよ？いますぐには。」

「滅相もない事を言う。さっさとどこかへいきたまえ。」

「・・・これだから貴族は・・・——じゃあな。迷い猫。」

「お、おいっ！まだ話が・・・！」

「嫌われ者は退散だ。」

ロキは天井にスウツと消えていった。

だけど、俺はもう少し話していたかった。

あいつが死神なら、俺を元の世界に連れ帰ることができるかも知れない。

「すまないね。嫌な思いをさせてしまった。」

「お前・・・俺を喰おうとしたんだぞ！？すまない、ですまかよ！」

「篝さん、落ち着いて・・・」

「これが落ち着けるかっ！この匂いはお前が元凶なのか！？ファウスト！」

一度は、いい奴だと思ったのに。

一度は、意識してしまったというのに。

裏切られた。

そんな気持ち俺の中を駆け巡った。

帰りたくない？そう考えた自分がバカらしく思えて仕方なかった。

「吸血鬼だからって、何してもいいと……は……ならな……」

急激な眠気が襲った。

（ダメだ……ここで負けるわけには……！）

そんな思いも虚しく、俺はその場に崩れ落ちた。

へムが睡眠香を振っているのにも気付かずに、そのまま。

「うわっ！遅刻だ！」

「お、おはようございます。」

「あ、へム！はよっ……ってか母さん、何で起してくれないんだよ！？遅刻じゃねえか！」

「ち、チコク……？」

「って……あれ？」

朝……なのに、辺りが暗い。

ここで俺は現実を引き戻された。

（そうだ……ここは……）

「こっちだったんだ……」

俺は肩をがつくりと落とした。

その瞬間、頭がズキンと痛んだ。

まるでハンマーで殴られたかのような、鈍い痛み。

「ん．．．俺．．．」

「どうかしましたか？」

「昨晚、何か．．．そう、大切な何かがあった気がする。けど何も．．．．．．思い出せない。」

「なあ、へム、昨日の夜．．．」

「さ、朝食ですよ。朝食。」

「あ．．．俺、自分の分は自分でやります．．．」

「そうですか？僕、作りますよ？」

「結構です．．．。」

心なし話をスルーされた気がしたが、きっと気のせいだろう。それにしても．．．．

（頭．．．痛え．．．）

「おはよう。篝。」

「はよ．．．ファウスト．．．」

俺は欠伸びながら言った。

（あれ．．．？）

どうしてなのか、理由は見当もつかないが、体が震える。ファウストと目が合うと、体が動かなくなる。

「今日は、町に行くんだったね。」

「そうだったな。」

「おやおや、随分といい加減だね。君が行きたいと言いだしたのに。」

「なんか、変なんだ。記憶が没落したみたいな、変な感覚。」

「体調が悪いなら今日でなくても構わないよ？」

「大丈夫、大丈夫。へム、お前も行くだろ？」

「ええ、ご一緒させていただきます。」

そうだった。

その『死神』とやらに会いに行くんだ。

・・・死神？

ズキツと頭痛が走る。

だいぶ、ここの悪臭にも慣れてきたところだというのに、今度は頭痛か。

と、己に悪態をついてみるが、全く効果は見られなかった。

第6夜 薔薇園の双狼

馬が2匹で引く馬車に乗り、歪んでガタガタと揺れる薄暗い森を抜けた。

何分走ったのかは正確にはわからなかったが、結構早く着いた気がした。

DBタウンの中心地、センター。

全体がどんよりとしている雰囲気だったが、流石ににぎわっていた。ただ、一つの道を除いては。

へムにこっそり訊ねてみると、あの道の先には、風俗や博打の店くらいしか並んでおらず、夜まではほとんどこの一角は眠りにつくという。

その名も、ダークテキーラストリート。

一方、町の中心には、食料、衣服等の店が立ち並び、昼を中心としている。

昼と夜。町の場所がそっくりそのまま変わってしまう。

「それで？ 町へは、何をしに？」

「その、『死神』に会いたいんだ。」

「そうなのかい？ なら、残念だが彼には会えないよ。」

「へ？ どういうことだ？」

「奴は夜の住人なんですよ。ほとんどこつちには顔も見せません。」

屋敷を出る前にその話をしていたと言うのにこの人たちは・・・と、俺は小さくため息をついた。まあ、そもそも、人でもないんだが。

「なら夜まで、観光でもするかい？」

「観光？ 何でそんな場所があるんだ？」

「何でって、他の国から来た人たちを楽しませる為に決まっているじゃないか。」

「他の国！？ 他にも国があるのか！？」

「篝さん、面白い事を言いますね。」

へムは冗談を言ったんだと思っているようだが、俺はいたって本気だ。

てつきりこの世界には、この『DBタウン』しかないものだと思っていた。

「では、どこに行きましょうか。ローズフェアリー辺りですかね。」

「ろ、ろーずふえありー?」

「ああ、私はあそこが好きだよ。行こうか。」

「だ、だからそれなに・・・って、おい!」

ファウストは機嫌が良さそうに、街道を進んでいった。

クリーム色の空が似合うだろう、と思ったが、この世界には黒と赤の空しか存在しない。美しいのに勿体無い。

向かう先は、ローズフェアリー。

当然、俺は場所も、どんなところなのかも知らず、ただついていているだけだ。

「ここですよ。」

サアッと風が吹いた。

風に混じって、ほのかに花の香りがする。

かがずにはいられない、魅惑の香り。

禁断の園、そんな言葉が実に似合う。

深紅の薔薇、漆黒の薔薇・・・やはり、ここにも赤と黒しかない。だが、本当に美しい。

「・・・・・・・・。」

あまりの美しさに、俺は感動するだけで、言葉では表現できなかった。

「どうだい?」

「ファウストが好きな場所っていうのは、なんかしっくりくる。」

「そうだろう?」

「僕もそう思います。」

へムが苦笑しながら言う。

美しいものには、同じく美しいものが似合う。

「あつ、ファウスト様。お久しぶりです。」

タバコブラウン

路考茶色の明るく、かつ、控えめなショートの髪。

ゴルデンオレンジ橙色の瞳は、女の子を思わせる。

でも、声質・髪型からして、男であることは間違いない。

「おや？その子は？」

「客人だよ、スコル。カガリだ。」

「よ、よろしく。」

「よろしくおねがいします。」

「そういえば、ハティさんは何なさってるんですか？」

「相変わらずです。ずっと、研究ばかり。」

彼の名前はスコル・モア・シュガルツィット。

双子のハティとともに、このローズフェアリーの管理人をしているらしい。

ハティの髪は暗い鉄紺色で、瞳の色は神秘的な瑠璃色。ラビスラズリ

ほとんど人前には出ず、内部の研究は彼の担当だ。

ちなみに2人とも、本当の姿は、狼だ。

もつと恐ろしい言い方をすると、狼男。

「ファウスト様、では、また明日に。」

「そうだったね。それじゃあ。」

俺たちはローズフェアリーを後にした。

「なあ、明日も来るのか？」

「明日、家でパーティをやるんだよ。言っていなかったかな？」

「き、聞いてない……。」

「篝さんはゆつくり食事なさっていいですから。」

「あ、ああ……。」

パーティ？化け物パーティ？

怖いもの見たさか、何となく興味はある。

でも、取って喰われる可能性があるし、あまり動かない方が無難だな。

第7夜　残酷な死神

そして、ついに夜がやってきた。

町の場所がそのまま動く、言葉の通りだった。

俺たちが通り抜けた町中は暗闇に包まれている。

代わりに、あのダークテキーラストリートには鈍い光が灯っていた。

妖しい

そんな言葉が、1番似合う。

ヘムには、まるで合成写真のように、似合っていないかった。

「バー、エリザベス・・・だったか？」

「そうだよ。最も、本当にいるかは別だけど。」

「は？」

「彼は神出鬼没だからね。死神のくせに。」

似通った店ばかりが立ち並んでいるため、1度迷えば出るのは相当難しそうだ。

その中で、俺は必死に「エリザベス」の文字を探した。

「あ、あれか？」

「・・・そうみたいですな。」

ヘムの声がいつもより心なしか低い。

嫌いな相手を目前にすると、こつも変わるものだろうか。

・・・カラン、コロン・・・

中にはむさい親父ばかりが転がっていた。

入るなり、じろりと睨まれる。

「ん？」

よく見てみると、奥のほうに1人だけ、若い男がいた。

両脇に女をはべらせて、笑いながら酒をあおっている。

黒いコートに京紫色の髪に金翼の耳飾り、緋色の瞳。
ラスベリ

（あれ・・・どこかで会ったような・・・？）

すると、向こうが俺たちに気付いて、ひらひらと手を振った。

「あいつか？」

「そうだよ。」

俺たちは奥に進んだ。

ヘムの顔色が見る見る悪くなっていく。

「大丈夫か？」

「はい、ちよつと、お酒は苦手なものですから。」

ぞく、つと背筋に冷たいものが走った。

「よお、迷い猫。」

「迷い猫って・・・あんだ、あの歌の・・・？」

「前に言っただろうがよ。」

「前？って・・・どういう・・・？」

「——そうか。なるほど、そういうことが。貴族様はやることが違うねえ。」

俺にはさっぱり意味がわからなかった。

ヘムは憎しみの籠もった目で睨みつけているし、ファウストは何と
もせず、薄ら笑いを浮べていた。

「それで？俺に何か用か？」

「俺を・・・元の世界へ戻して欲しいんだ。」

「そりゃあ、妥当な策だな・・・こんなところにいたら、何れは
喰われるし。見る、周りの目を。」

周りの親父どもは相変わらず睨みつけている。

俺は何となく肩をすくめた。

「ロキ、早くしてくれないか？」

ファウストがさりと云った。感情のない、冷たい言葉だった。

「出来るといえば、できる。ただ・・・」

「ただ？」

「ちょっとばかり、寿命が延びちまうけど。」

「ちよつとつて・・・どのくらいだ？」

「200年くらいは、そのままだ。」

「に、200年!？」

俺は突然のカミングアウトに驚き、顎が外れるかと思った。

ちよつと〓200年なんて、そんな計算成り立つわけがない。

「それと・・・」

「まだあるのか!？」

「向こうの光は強い。龍の鱗で瞳を覆わないと、目玉を焦がすぞ?」

唯一ここから戻ってきたものが目玉を焦がしてしまった理由が、今ようやく理解できた。

ということは、恐ろしい言葉とはこの世界の事が・・・?

自殺してしまったのも、なんとなくわからなくもない。

「少し・・・考えさせてくれ。」

(ごめん、ケンタ。)

俺たちは、エリザベスを出て、馬車に乗り、あの不気味な森を抜けて、屋敷へ戻った。

この世界の恐怖が、今になって身にしてみた。

「ああ・・・月が・・・赤い・・・」

俺は、絶望のあまり現実から逃げようとしていた。

ここにいれば喰われ、帰れば200年も生き、目は焦げる。

あの後ファウストに聞いた話だが、目を焦がさないための「龍の鱗」は、龍自体が絶滅しているため、入手はきわめて困難らしい。

「浦島太郎の方がましだよな。」

本気でそう思った。

時は流れ、翌日の夜。

今日は、レンドル家で行われる盛大なパーティ。

招かれるのは、5公5侯7伯8子10男爵。

月に一度、公爵家が舞踏会を催す決まりがあるのだとか。

そして、なぜか俺もその舞踏会に出ることになってしまった。

『私の連れだというから、気にせず食事をしていてくれ。』

とのファウストのお達しだが、どうせ出されるメニューは赤い肉だろう？

逆に、気にせず俺を部屋に放っておいてほしかった。

数十分前によそよしくメイドらしい人が入ってきて、俺を着替えさせた。

歴史の時に習ったルイ14世が身につけているような煌びやかで豪勢で、ふりふりの服。

現代日本人の俺には、牢屋にいたときの服よりさらに似合わない。

・・・コンコン・・・

「あ、どうぞ。」

「どうだい？——うん、なかなか似合うじゃないか。」

ファウストは、さらに美が引き立っていた。

いっそ、かぼちゃパンツも着こなせそうだ。

美しいラインが秀でて、俺は一瞬言葉を失った。

「・・・お前の方が似合ってるよ。」

「おや、嬉しいことを言ってくれね。」

へムもパーティに出るらしく、まだ準備中だそうだ。

つまり、この部屋にいるのは現在、ファウストと俺の2人きり。

「そうそう、篝。その服にどうして襟があまりないのか、わかるかい？」

「わかるわけないだろ。」

ファウストは耳元で囁く。

「首から血をいただきやすくするためだよ。」

「なっ・・・なっ・・・」

ファウストはにこつと笑った。

だが、瞳は真剣そのもの。絶対、この言葉に嘘偽りはない。自然と、そう思えてしまう。

ファウストは俺の首筋にそつと、冷えた指先をあてがった。

「ここに、牙が2本、突き刺さる。」

ファウストの口が、ゆつくりと開く。

そこには、人間では考えられないほど鋭利に牙が覗いていた。俺は息を飲んだ。

鼓動が早くなつていつているのがわかる。

「私以外に・・・咬まれてはいけないよ？いいね？」

「あ、ああ・・・」

「いい子だ。」

「ファウスト様、篝さん、そろそろ皆様がそろい始めてますよー？」

一瞬の沈黙は、ヘムの言葉によつてすぐに流れていった。

「今行くよ。」

俺は小さく安堵の息をついた。

そしてファウストは俺の手を小さく引いて、行くよ、と促した。

——恐怖の舞踏会の始まりだ。

第8夜 場違い高校生

会場、となったその場所に足を踏み入れたのは初めてだった。大きなシャンデリア。顔が映るほどぴかぴかのフローリング。白いテーブルクロスのかかった丸いテーブルの上には、たくさんの食材が乗っていた。

赤い……。赤い……。赤い……。

俺が食べられそうなものは……。クロワッサン。

念のために2つに割ってみたが、なんとか大丈夫そうだ。

「じゃあ、私は挨拶があるから、行くよ？」

「俺はこの辺にいるよ。踊れないしな。」

「僕もファウスト様と行きますが、よろしいですか？」

「気にしないでいいって。」

へムは俺を気遣いながらも、ぱたぱたと子犬のようにファウストの後を付いていった。

舞踏会は滞りなく進んでいるようだった。

ファウストのお堅い挨拶も終わって、早速ダンスタイム。

俺は、一時外の空気を吸いに、表へ出た。

「……………うつ……………ぐ……………」

庭の端の方でうずくまっている男がいた。

「だ、大丈夫か!？」

男は嘔吐していた。

俺は、ふと男の格好に違和感を抱いた。

黒髪に、黒い瞳。こいつからは、恐怖感を微塵にも感じない。

「お前も……………人間……………なのか？」

男はびくつと肩を震わせて、口元を押さえながら振り向いた。

「……………も?つちゆうことは……………あんたも？」

そして男はまた元の体勢に戻って、嘔吐し続けた。

大方、真っ赤な生肉でも口にしてしまったのだろう。

あれは・・・人間が口にするものではない。

「治まったか？」

「おおきに。——ええつと・・・俺は、骸城^{ガイジョウ ヒノト}丁。」

言葉になまりがある。多分、関西出身なんだろう。

「俺は、篝。蒼李 篝。まあもつとも、名字は必要ないけどな。」

「ここつて・・・どこなんや？」

「それを・・・俺に説明しろと・・・。」

「だって君しか頼る奴おらんもん。」

「だよなあ・・・でも、俺にもファウストとヘムくらいしか・・・」

「あれ？篝さん、どうしたんですか？こんなところで。」

「す、スコル？なんでここに・・・」

あのローズフェアリーの管理人・スコルだ。

「なんでつて・・・僕の家、一応子爵なので。」

「あ、ああ・・・」

「それより、兄さん見かけませんでした？先にきてるはずなんだけど。」

「いや、見てないけど。」

もし見ても、初対面ならわかるまい。

そんな余計な言葉は飲み込んだ。

スコルはそのまま行ってしまった。

「えらいかつこいい兄ちゃんやな。」

「この人は大体美形だよ。」

俺はふと、あの言葉を思い出した。

『あのままあそこを彷徨っていれば、ギルダム公爵のところへ連れて行かれて・・・』

俺がこちらに来たばかりの頃にファウストに言われた言葉だ。ふと、疑問が浮かぶ。

「・・・どうやってここまで来たんだ？」

「大阪の町でぶらぶら歩いとったら、真っ赤な髪 of 兄ちゃんが足元から消えていくさかい、驚いてひっつかまえたら、このざまや。」

「赤い髪？」

「そうや。そういえば、耳飾もしてたような……。」

なるほど、死神か。

俺の中で納得したが、当然丁は納得しないだろう。

とりあえず、俺と丁はパーティ会場へ戻ることにした。

「さあて、ここで問題やあ！」

ジャジャン。

まで1人で言い切つて、俺に『問題』とやらを出したがっている丁。でも正直、俺はそのテンションにはついていけない。

先ほどまで知リたがつていた、ここはどこ、については……

『まあ、ええか。』

で、終了。とことん、適當。

「俺の正体はなんでしょーか！」

「人間。」

「ピンポーン……って、なんでやねん！そないなこと、わかりきつとるやる！」

ナイスノリツツコミ……とはあえて言わなかった。

関西人のテンションは高いと聞いたが、慣れるまで時間がかかりそうだ。

俺は、一息ついてから口を開いた。

「じゃ、何についての正体？」

「チキユーや。俺のチキユーでの正体。」

「そんなの知るわけないだろ？俺、大阪行つた事ないし。」

「んー、じゃあ、ヒント！俺は、18歳や。」

「あ、俺16。」

「おつ、俺のほうがお兄さんやな。……って、話をずらすな

！
」

自分でずらしたんだろうが。

俺は思った。丁と一緒にいれば、俺はつっこみキングになれるのではないかと。当然、なりたくもないが。

「あー、降参だー。答えは？」

「答えは・・・ドウルドウルドウル・・・ジャン！」

「ジャン？」

「マホー使いや！」

「は？」

ま、マホー使い???

「内緒やで。」

「は？へ、いや、その、何？」

「見せたほうが早いな。」

丁が近くの小石を指差し、そのまま指を持ち上げると、石も宙に浮かんだ。

俺は混乱状態に陥っていた。

仮にも丁は現実世界・地球からやってきたお笑い系高校生だろう？

なのに・・・魔法使いですと？

「どや？」

「いや、どやって言われても・・・」

俄かには信じられません・・・。

「篝、どこに行つてたんだい？私のスピーチも聞かずに・・・
つて、その子は？」

ファウストがヘムを引き連れて屋敷から来た。

きっと俺の居場所をスコルに聞いたのだろう。

「こいつは、人間の丁。」

「初めまして、丁です。」

そして浮かせている石を見て、目を丸くし、即座に丁の腕を掴んだ。

「おわっ！」

「君、ちょっと来なさい。」

「つて、何？何！？」

「簀さんはパーティを楽しんでください！
楽しめるか、この状況で。」

多分、ヘムの言葉の意味は、「ついてくるな」。
俺は屋敷内に戻り、クロワッサンを頬張った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4533b/>

† 月光、血く染まる夜に †

2010年10月9日20時43分発行